

「喜悦の盈満」

第二講「喜悦の盈満」

ヨハネ I 1:1~10

第二講 「喜悦の盈満」

はじめに

一、教理と経験

二、信仰者の喜び

三、満ちあふれる喜び

はじめに

みことばに語られていることを考えるときに大切なこと。

- ・これらは私たちの現実から離れた抽象論ではない。
- ・現実生活の中で心の中に踏みしめていくことができる事実的な問題。

高い理論的な事がらと自分の経験的な現実的な事がらとを結びつけようとする心構えと努力が非常に大切。

一、教理と経験

聖書に書かれていることはすべてリアリティー。

単なる理想ではないし、到達できない標準でもない。

すべて経験的事実として体験できること。思想ではなく、現実の世界の問題。

それを得ることが私たちの幸いであり、そのための能力と恵みを神は与えてくださる。

なぜリアリティーにならないのか。

- ・意識しない不服従や罪を犯しながらでも持てると考えているから。
→しかしこれは両立しない＝罪と神との交わりは両立しない。
- ・「きよめ」が経験できないのは、「きよめ」がないからではなく、「きよめ」を経験させてくださる聖霊を拒んでいるから。
単純な信仰と良心的な服従の継続があれば、神はしてくださる。

二、 信仰者の喜び

喜びとは思想ではなく、事実。

喜んでいるかいないかは自分でわかる。感じることができる。

喜びという思想の考察ではなく、実際に喜んでいるかどうか(リアリティー)。

喜んでいないのに信仰で喜んでいるということはありません。

生まれ変わったクリスチャンはみな、それまで経験したことがない喜びを知っている。

- ・新生の時に与えられる、この世のものからではない喜び。
- ・環境に根を置いていない喜び。

(多いか少ないか、あふれているかいないか、常にあるかそうでないかは別として)

三、満ちあふれる喜び

問題はその喜びが満ちあふれているか否か

- ・聖書は「あること」と「満ちあふれていること」を明確に区別している。
- ・それがあるときには、必ず条件がある。原因・結果の関係がある。

喜びが満ちあふれる条件

- ① 交わり—神さまとの関係がぴったりと一致している状態。
- ② 光のうちを歩む—闇の中を歩まないこと。服従していること。
- ③ 罪からきよめる—光のうちを歩み続けることができない不信仰と反逆の性質が、イエスの血によって除かれる。

妨げが取り除かれ、光のうちを歩み続けて神との交わりが保たれるときに、クリスチャンの喜びは、満ちあふれるものとなる。

まとめ

「きよめ」とは、

すべての妨げが取り除かれて、私たちが感謝と喜びにあふれる
生涯を歩むことができるようにしてくれるもの。